

ショパンの「ワルツ1番」、始まり始まり、メリハリの効いたクリアな躍動、優雅な微睡みの円舞でなし。すぐさま、ピアニストの術中に嵌まり、思惑と相対峙、もたれ込みは拒絶、否応なく刮目覚醒。「4つのマズルカ」、強めの痼性的アクセントはなし、その縛りなくマイルド・スタンス。楽天的な明るさでなく、素朴な明快さ。

ショパンの「ピアノ協奏曲2番」の2楽章ラルゲット、オケ・パートをも加えたヴァージョン。ピアノのソロを依怙臆、一音一音切々と情感込めて、思い入れタップリのロマンシズム際立ちの予想。豈図らんやオケとがっぷり四つのスケール感、コンダクター的バランス、正道のコンチェルトの展開、これもアリあり成程との納得。

リストの「ため息」、甘いメロディーに作曲家お得意の装飾音がヒラヒラ絡みつく。以前目障り耳障りと思えた飾り付けの尾ヒレ、柔らかい念押しにてエンドレスの絡み合い、心地よいセンチメンタル・ファイト。ソフトタッチなれど明け透けのガラス張り、ヴェールの覆い力不足、赤裸々に心の襞が手に取る様、ヤワでなく強さメンタルの充実。

ドビュッシーの「喜びの島」、慌てず騒がず気分ハイへ、過度なる高揚には抑止、確りとした進行管理。次第々々ノリノリ・テンション、物語の背景を踏まえ冷静にコントロール。ダイナミックでエネルギー、元気印のバイタリティ、上滑りなく堅実で鮮やか。ドラマチックなクライマックス、歓喜の大爆発、興奮の坩堝ゾーン、爽快な達成感。

サロンコンサート、初めての場所に戸惑い、響きの優れたスペース、ちょっとした打鍵が大きく反響。忍び返しやウグイス張りは大袈裟だが、過剰なレスポンス、内緒話が公然のヒミツの様。演奏家は場数を踏んでの百戦錬磨、かくもありきと素知らぬ表情、聴き手は平静さの喪失狼狽えパニクリがち、その内ありのままの受け入れクリア安堵感。(2019.6.16)

---

ショパン：ワルツ 1番 変ホ長調 Op.18「華麗なる大円舞曲」

ショパン：ピアノ協奏曲 2番 ヘ短調 Op.21から 2楽章(ピアノソロ版)

ショパン：4つのマズルカ Op.24

リスト：3つの演奏会用練習曲 3番 変ニ長調 S144,R5/3「ため息」

ドビュッシー：夢

ドビュッシー：喜びの島

リスト：リスト：コンソレーション 3番 G.172-3

---

---

(アンコール)

ショパン：ワルツ 6番 変ニ長調 Op.64-1「小犬のワルツ」

モーツァルト：ピアノソナタ 11番 イ長調 K.331 3楽章「トルコ行進曲」

---